

第 9 回：沖縄らしさとは何だろう？

1. 岡本太郎という生き方

・ 概要

- 1911年(明治44年)生まれ、1996年没。魚座O型。1929年から1940年(太郎18歳から29歳)までパリで過ごす。最終学歴、ソルボンヌ大学哲学科。民族学の世界的権威のひとり、マルセル・モースに師事する。
- 1970年大阪万博と太陽の塔
 - ◇ 1964年東京オリンピック以来の国家プロジェクト。テーマは「人類の進歩と調和」
 - ◇ アメリカに次ぐ第二位の経済大国となった日本の象徴的なイベント。



・ 自分と闘う

- 人生は積み重ねだと誰でも思っているようだ。ぼくは逆に、積みへらすべきだと思う。財産も知識も、蓄えれば蓄えるほど、却って人間は自在さを失ってしまう。過去の蓄積にこだわると、いつの間にか堆積物に埋もれて身動きができなくなる。

人生に挑み、本当に生きるには、瞬間瞬間に新しく生まれかわって運命をひらくのだ。それには心身とも無一物、無条件でなければならない。捨てれば捨てるほど、いのちは分厚く、純粋に膨らんでくる。

今までの自分なんか、蹴飛ばしてやる。そのつもりで、ちょうどいい。

ふつう自分に忠実だなんていう人に限って、自分を大事にして、自分を破ろうとしない。社会的な状況や世間体を考えて自分を守ろうとする。

それでは駄目だ。社会的状況や世間体とも闘う。アンチである、と同時に自分に対しても闘わなければならない。これはむずかしい。きつい。社会では否定されるだろう。だが、そういうほんとうの生き方を生きることが人生の筋だ。

自分に忠実に生きたいなんて考えるのは、むしろいけない。そんな生き方は安易で、甘えがある。ほんとうに生きて行くためには、自分自身と闘わなければだめだ。

自分らしくある必要はない。むしろ、「人間らしく」生きる道を考えて欲しい。「忠実」という言葉の意味を考えたことがあるだろうか。忠実の「忠」とはくまめやか、まごころを尽くすということだ。自分に対してまごころを尽くすというのは、自分に厳しく、残酷に挑むことだ。

・ 分岐点

- 人間は本当は、いつでも二つの道の分岐点に立たされているのだ。この道をとるべきか、あの方か。

一方はいわばすでに馴れた、見通しのついた道だ。安全だ。一方は何か危険を感じる。もしその方に行けば、自分はいったいどうなってしまうか。不安なのだ。しかし惹かれる。本当はそちらの方が情熱を覚える本当の道なのだが、迷う。まことに悲劇の岐路。

こんな風にいうと、大げさに思われるかもしれないが、人間本来、自分では気づかずに、毎日ささやかではあってもこの分かれ道のポイントに立たされているはずなんだ。

何でもない一日のうちに、あれかこれかの決定的瞬間は絶え間なく待ち構えている。朝、目を覚ましてから、夜寝るまで。瞬間瞬間に。

まったく日常的な些事、たとえば朝、寝床の中で、起き出そうか、いやもう少し寝ていようか。町に出て、バスにしようか電車に乗ろうか。会社に行って上役に会う。頭をどの程度下げようか、それとも知らんぷりをして通り過ぎようか。同僚に対しても。また会議の席で、本当にいいたいことを言うべきか、それでは反発もあるだろうし、出る釘は打たれる。黙っていようか。……ひとによってさまざまだが、ほとんど誰でも、自分で意識するしないにかかわらず、常に迷い、選択を迫られている。

- そしてみんな、必ずといってよいほど、安全な、間違いない道をとってしまう。それは保身の道だから。その方がモラルだと思っている。ぼくは、ほんとうにうんざりする。

人々は運命に対して惰性的であることに安心している。これは昔からの慣習でもあるようだ。

いままでは、謙虚であるということが世渡りの第一歩みたいなものと考えられてきた。だが僕の考え方では、それは非常に傲慢だとはいえないが、不遜だと思う。自分はどのくらい能力があり、どのくらいのことをすべき器であるかということを見極めようとしなくて、つまり、自分のことが自分でわからないのに、勝手に自分はダメだと見切り、安全な道をとってしまう。

無難な道を取り、皆と同じような動作をすること、つまり世間知に従って、この世の中に抵抗なく生きながらえていくことが、あたかも美德であるように思われているのだ。信念をもって、人とは違った言動をし、あえて筋を通すというような生き方は、その人にとって単に危険というよりも、まるで悪徳であり、また他に対して無作法なものをつきつけるとみなされる。

ぼくはいつもあたりを見回して、その煮えきらない、惰性的な人々の生き方に憤りを感じ続けている。

- ぼくが危険な道を運命として選び、賭ける決意をはっきり自覚したのは25歳のときだった。パリで生活していた頃だ。

それまで、ぼくでもやはり迷い続けていた。その時分、成功することが人生の目的であり、メリットであるように誰でもが思っていたし、そう教育されてきた。

18歳でパリに来て、画家としての夢を描いた。そして芸術運動の再前衛のグループに飛び込んだ。しかしやがて一方、人間の本当の生き方は、もっとひろく、そしてもっとぎりぎりの、時分という人間の全存在、生命それ自体が完全燃焼するような生に賭けるべきなのではないか、そういう自分自身への問いに全身でぶつからずにはいられなかった。

絵描きは絵の技術だけ、腕を磨けばいいという一般的な考え方には、ぼくはどうしても納得できなかったのだ。

しかしそれは極めて危険な問いだ。芸術ばかりではない。他の部門のあらゆる専門家、さまざまな企業内の社員でもみんなそうだと思うのだが、この道一筋、ただ自分の職能だけに精進すれば尊敬もされる、報われもする。

それを根本的に疑ったり、捨ててしまえば生きてはいけない。食ってもいけないということにな

る。与えられた枠からはみ出して、いわば無目的に自分をひろげていくとすれば、その先は真っ暗な未知、最も危険な状況に落ち込むことを覚悟しなければならない。

それは極端に言えば死を意味する。

しかし、社会の分業化された狭いシステムの中に自分を閉じ込め、安全に、間違いない生き方をすることがほんとうであるのかどうか、若いぼくの心につきつけられた強烈な疑問だった。

残酷な思いで、迷った。ぼくはごまかすことができないたちだから。そして……いまでもはっきりと思い出す。ある夕方、ぼくはカフェのテラスにいた。一人で座って、絶望的な気持ちで街路を見つめていた。薄い夕日が斜めに差し込んでいた。

「安全な道をとるか、危険な道をとるか、だ」

あれか、これか。

この時にこそ己に決断を下すのだ。戦慄が身体の中を通り抜ける。この瞬間に、自分自身になるのだ、なるべきだ、ぐっと総身に力を入れた。

「危険な道をとる」

いのちを投げ出す気持ちで、自らに誓った。死に直面する意外の生はないのだ。その空しい条件は切り捨てよう。そして、運命を爆発させるのだ。

日本の現実に自分をぶつけること、惰性的な精神風土と対決し、ノーと叫び、挑む。まず芸術表現の上で、日本の通念とはまったく反対な表現をうち出した。その頃はワビ、サビ、シブミで暗くよんだような色あいの画面でないと高尚な芸術だと思われなかったのに、真赤、真青、黄色、と原色をぶつけ、あいつは色音痴だ、などとさんざん悪口をいわれた。また、この道一筋でしんねりむつつりやらないと尊敬されないのに、あらゆる問題について発言し、全身をぶつけて「ノー」と言った。まったく危険な道である。

端的に言えば、それでは収入は得られない。食えない。つまり生活できないということである。好かれる必要はない。売らないという前提で絵を描き、あらゆる面で権威主義にたてつき、いわば常識を超えて、人のいわないことを敢えて言い、挑んだ。

戦後、ぼくが猛烈に闘いはじめた頃、親しい友人や、好意的なジャーナリストは真剣に忠告してくれた。

「あなたのようなことを言ったりやったりしたら、この社会から消されてしまいますよ。西洋なら別だが、日本では通らない」

確かにぼくは異端者扱いされ、村八分を食った。しかし、それは逆に生き甲斐だ。その悲劇に血を流しながら、にっこりと笑って筋を貫いた。

・ 「危険な選択」の価値

- 夢に賭けても成功しないかもしれない。そして、そのとき、ああ、あのとき両親のいうことを聞いておけばよかったと悔やむこともあるかもしれない。

でも、失敗したっていいじゃないか。不成功を恐れてはいけない。人間の大部分の人々が成功しないのが普通なんだ。

しかし、挑戦した上での不成功者と、挑戦を避けたままの不成功者とはまったく天地の隔りがある。挑戦した不成功者には、再挑戦者としての新しい輝きが約束されるだろうが、挑戦を避けたままで降りてしまったやつには新しい人生などはない。ただ成り行きに任せて空しい生涯を送るに違いないだろう。

それに、人間にとって成功とはいったい何だろう。結局のところ、自分の夢に向かって自分がどれだけ挑んだか、努力したかどうか、ではないだろうか。

夢がたとえ成就しなかったとしても、精いっぱい挑戦した、それで爽やかだ。

- しかし、よく考えてみてほしい。あれかこれかという場合に、なぜ迷うのか。もう一方の道は誰でもが選ぶ、ちゃんと食えることが保証された安全な道だ。それなら迷うことはないはずだ。もし食うことだけを考えるなら。

そうじゃないから迷うんだ。危険だ、という道は必ず、自分の生きたい道なのだ。ほんとはそっちに進みたいんだ。

だから、そっちに進むべきだ。ぼくはいつでも、あれかこれかという場合、これは自分にとってマイナスだな、危険だなと思う方を選ぶことにしている。誰だって人間は弱いし、自分が大事だから、逃げたがる。頭で考えて、いい方を選ぼうなんて思ったら、なんとかかんとか理屈をつけて安全な方に行ってしまうものなのだ。

かまわないから、こっちに行ったら駄目だ、と思う方に賭ける。

人間は自分をきつい条件の中に追い込んだときに、初めて意思の強弱が出てくる。

この点を実に多くの人がカン違いしている。たとえば、画家にしても才能があるから絵を描いているんだらうとか、情熱があるから行動できるんだとか人はいうが、そうじゃない。

逆だ。何かをやろうと決意するから意思もエネルギーもふき出してくる。

何も行動しないでいては意思なんてものありやしない。

自信はない、でもとにかくやってみようか決意する。その一瞬一瞬に賭けて、ひたすらやってみる。それだけでいいんだ。また、それしかないんだ。

意志を強くする方法なんてありはしない。そんな余計なことを考えるより、ほんとうに今やりたいことに、全身全霊をぶつけて集中することだ。

ひたすらそれを貫いてみる。はたからみれば、あの人は何という意志の強い人なんだろうということになるんだ。

・ 絶対感で生きる

- ぼくは、プライドというのは絶対感だと思う。

自分がバカであろうと、非力であろうと、それがオレだ、そういう自分全体に責任を持って、堂々と押し出す。それがプライドだ。ところが自尊心だとかプライドだといいいながら、まるで反対のことを考えている人間が多い。

他人に対して自分がどうであるか、つまり、他人は自分のことをどう見ているかなんてことを気にしていたら、絶対的な自分というものはなくなってしまう。プライドがあれば、他人の前で自分をよく見せようという必要はないのに、他人の前に出ると、自分をよく見せようと思ってしまうのは、その人間にコンプレックスがあるからだ。

大切なのは、他に対してプライドをもつことでなく、自分自身に対してプライドを持つことだ。

他に対して、プライドを見せるということは、他人に基準を置いて自分を考えていることだ。そんなものは本物のプライドじゃない。たとえ、他人にバカにされようが、けなされようが、笑われようが、自分がほんとうに生きている手応えをもつことが、プライドなんだ。

相対的なプライドではなくて、絶対感を持つこと、それが、ほんとうのプライドだ。このことを貫けなかったら、人間として純粋に生きてはいけない。

・ 芸術の本質

- 芸術とは人生である。人生とは芸術である。絶対感で生きることが芸術の本質である。絶対感で生きた結果が芸術と呼ばれるに過ぎない。

芸術の三原則： きれいであってはいけない、うまくあってはいけない、心地よくあってはいけない。ある女性が太郎の絵画を2時間もじっと見つめた後、「あら、いやな感じ」▶ これが芸術

きれいと美しいはまったく違うものである。きれいなものは美しくない。醜いものほど美しい。芸術はうまくあってはいけない。学習・技術による洗練は芸術ではない。

子どもが画く線は、天才的だ。3歳くらいまでの子どもは、他人の意見も、他人の絵もまったく気にしない。ところが、物心がついてくると、人の目を気にして、他人の望むものをつくりはじめる。「幹には枝、枝に葉、葉は緑」と考えはじめると、絵がまったくつまらなくなる。高校生の絵など見るに耐えない。うまいということは、つまらないこと。

美しいというのはもっと無条件で、絶対的なものである。みて楽しいとか、体裁がいいというようなことは全然無視して、ひたすら生命がひらき高揚したときに、美しいという感動が起こるのだ。それはだから場合によっては、一見ほとんど醜い相を呈することさえある。無意味だったり、恐ろしい、またゾットするようなセンセーションであったりする。しかしそれでも美しいのである。

「あそこの奥さんはきれいな人だ」というのは、その時代の「美人型」にはまっているからだ。有名な女優さんに目つき、口もと、鼻のかっこうが似ていると、自動的に美人と言われる。

だから「美人」というより、本当は「きれい人」というべきなのだ。ぼくにいわせれば、本当の美人というのはその人の人間像全体がそのままの姿において充実し、確乎とした生命感を現している姿だと思う。皺クチャのお婆さんだって、美しくありえる。

まして、芸術の場合、「きれい」と「美」とは厳格に区別しなければならない。「あら、きれいねえ」と言われるような絵は、相対的価値しか持っていない。その時代の承認済みの型、味わい、つまり流行にあてはまって、抵抗がない。たとえ感覚的・官能的にはちょっと気持ちよくても、単なる趣味、ムードであるにすぎず、魂をすくいあげる感動にはならない。

「いいわね」というのは、つまり「どうでもいいわね」というのと同じことだ。

- ほんとうに生きようとする人間にとって、人生はまことに苦悩に満ちている。

矛盾に体当たりし、瞬間瞬間に傷つき、総身に血を噴き出しながら、雄々しく生きる。生命のチャンピオン、そして生け贄。それが真の芸術家だ。

その姿はほとんど直視に絶えない。

この悲劇的な、いやったらしいまでの生命感を、感じとらない人は幸か不幸か……。

感じるセンシブルな人にとって、芸術はまさに血みどろなのだ。

最も人間的な表情を、激しく、深く、豊かにうち出す。その激しさが美しいのである。高貴なのだ。美は人間の生き方の最も緊張した瞬間に、戦慄的にたちあらわれる。

- 芸術といっても、なにも絵を描いたり、楽器を奏でたり、文章をひねくつたりすることではない。そんなことは全くなくても、素っ裸で、豊かに、無条件に生きること。

ぼくが芸術というのは生きることそのものである。人間として最も強烈に生きる者、無条件に生命を突き出し爆発する、その生き方こそが芸術なのだということを強調したい。

全身全霊が宇宙に向かって無条件にパーッとひらくこと。それが「爆発」だ。人生は本来、瞬間瞬間に、無償、無目的に爆発し続けるべきだ。いのちの本当のあり方だ。

失った人間の原点を取り戻し、強烈に、ふくらんで生きている人間が芸術家なのだ。

もっと政治が芸術の香気をもち、経済が無償と思われるような夢に賭ける。

環境問題も大事だし、列島改造論も結構だが、容れるものを前提とするより、まず、「日本人」が変身し、平気で、ひらけた表情をうち出すべきだ。そして現代の政治・経済がおちこんでいる、あまりにも非人間的なあり方に「人間存在」と息吹きをふき入れ、生き甲斐を奪回すべきなのである。

政治はまことに政治屋さんの政治。経済人は利潤だけを道徳の基準にしている。そのモノポリー、両者のなれあいすべてを墮落させ、不毛にさせる。これを根本的にひっくり返し、「芸術」つまり純粋な人間的存在と対決させることによって生命力・精神を生き返らせなければならない。



2. 岡本太郎の沖縄

- ・ なぜ、『沖縄文化論』か？
 - 沖縄らしさとはなんだろう？
 - 私たちが目指す未来は、形にはない。赤瓦でも、美ら海でも、県立美術館でも、首里城公園でも、リゾートホテルでも、組踊でも、紅型でも、焼き物でもない。
 - 沖縄文化の本質を探することは、沖縄の将来の道筋を決めることである。私たちが目指す沖縄を知るために、かつて存在していた沖縄の本質を理解する。
 - ・ 岡本太郎の『沖縄文化論 — 忘れられた日本』
 - 1959年11月～12月(太郎48歳)、友人の招待で沖縄に初訪問。終戦後14年。2014年の現在から振り返って、2000年に太平洋戦争が終戦を迎えたイメージだ。
 - 1966年12月26日から5日間開かれる、久高島のイザイホーを訪問。
 - 1972年10月、本土復帰にあたって。
 - 「沖縄に日本の本質を、自分自身を見る」 ▶ 純粋なものは「鏡」になる。 ▶ 沖縄の(当時の)純粋さとは何だろう？
 - ・ 『沖縄文化論』についての評価
 - 岡本敏子によるあとがきより

三島由紀夫は「『沖縄文化論』になぜ読売文学賞をやらないんだ。僕が審査員なら絶対あれを推すな。内容といい、文章といい、あれこそ文学だ」と憤りをこめて絶賛していた。やがて毎日出版文化賞を贈られた。
 - 外間守善(伊波普猷の後継者、沖縄学の第一人者として知られた。2012年没)

岡本太郎……なんて無礼な、不作法な人だろう、と思った。初対面の岡本太郎に対する私のいつわらぬ印象だった。沖縄の文化人数人が遠来の天才芸術家をもてなすため、那覇の最高の料亭、最高の料理に美しい琉球舞踊を添えての盛宴をしつらえたことがある。ところが入って来た岡本は、誰彼に会釈するでなし、いきなり座敷の隅っこに置いてある太鼓を荒っぽく叩き出した。それだけではない。宴がまだ終わらないのに畳座敷に寝ころがる始末である。私はこういう場所で、傍若無人に振る舞う人に会うのは初めてなのですっかり閉口した。確か、一九六六年(昭和四十一)、久高島の神祭りイザイホーの年だったと思う。だから、岡本太郎の書いた「忘れられた日本—沖縄文化論」(一九六一年、中央公論社刊)は意識的に避けてきた。

沖縄がドル時代だったその頃、本土から来る人たちが必要以上に沖縄を礼賛したり、沖縄戦で散華した若者たちの死を「動物的忠誠心」*といういい方で印象記を書いたり、戦中、戦後の沖縄の苦悩を知らなすぎることに向かって腹を立てていたせいもあったかもしれない。とにかく岡本太郎という大は大嫌いだった。
- * 大宅評論家の大宅壮一(おおや そういち)が一九五九(昭和三四)年六月沖縄取材にやって来て、沖縄戦で犠牲になった学徒達に対して「動物的忠誠心」「家畜化された盲従」と批判したことが反響を呼んだ。帰京してから大宅壮一は、『文藝春秋』の九月号に、つぎのように書いている。
- 批判をとまなわない忠誠心は、その“純粋性”の故に美化されやすいが、これは奴隷道徳の一種で、極端ないいかたをすれば、飼いやられた家畜の主人にたいする忠誠心のようなものである。こういった忠誠心は、どうして生まれたかという、多年の権力者の“動物的訓練”

の結果と見られる点が多分にある。

ところが、あれから三十六年経った今(偶然復帰三十周年・イザイホーの年)、私は改題された『沖縄文化論－忘れられた日本』に真っ向から挑むことになり、隅から隅まで読んで驚嘆している。そして岡本太郎の天才ぶりと直感と直観の確かさに気づけなかった自分に恥じ大っている。岡本太郎がパリ大学・ソルボンヌで民族学を学び、専攻領域にオセアニアを選んで、島に生きる人々、島に育まれる文化に関心を寄せていた、ということをもっと早く知っていたら、私の岡本観は根本から異なっていたであろう。沖縄から日本を、アジアを、そして世界を学びながら、島社会に生まれる歴史と文化の探究を始めていた私は、オセアニアの島々から「島嶼学」という学問を意識し、目ざめていっただけに、岡本太郎と出会ったその時に、オセアニアと沖縄の島々について話しあえなかったことが今にして残念である。岡本太郎は世評にのぼるようなただのアバンギャルド芸術家ではなかった。フランスでほんものの民族学を学び、「島」から「国」を見ることのできるまなざしを持った進歩的な学者であり、優れて前衛的な芸術家だったのである。

『沖縄文化論』を読んでからの私は、すっかり岡本太郎観が変わってしまった。私を辟易させたあの不作法は、純粹に生きてきた人の一種の照れだったのであろうか。できるものならもう一度会って、「沖縄」というシマ(島)から「日本」というクニ(国)を、アジアを、世界を、語りあい学びたいと思う民族学者、芸術家である。

・ 沖縄の肌触り

- 『日本残酷物語』に、柳田国男氏の「山の人生」の一節が収録されている。

明治初期、奥美濃のある炭焼きの話である。

「女房はとっくに死んで、あとには13になる男の子が一人あった。そこへどうした事情であったか、同じ年位の小娘をもらってきて、山の炭焼き小屋でいっしょに育てていた。なんとしても炭は売れず、なんと里へ降りても、いつも一合の米も手に入らなかった。最後の日にも空手でもどってきて、飢えきっている小さい者の顔を見るのがつらさに、ずっと小屋の奥へ入って昼寝をしてしまった。

目が覚めてみると、小屋の口いっぱい夕日がさしていた。秋の末のことであったという。二人の子どもがその日当たりのところにしゃがんで、しきりになにかしているの、傍へ行って見たら一生懸命に仕事に使う大きな斧を磨いていた。おとう、これで私達を殺してくれといったそうである。そうして入り口の材木を枕にして、二人ながら仰向けに寝たそうである。それをみるとくらくらとして、前後の考えもなく二人の首を打ち落としてしまった。それで自分は死ぬことができなくてやがて捕らえられて牢に入れられた。この親爺がもう60近くなってから、特赦を受けて世の中へ出てきたのである。そうしてそれからどうなったか、すぐにまた分らなくなってしまった。」

私はかつてない衝撃を受けた。一人間生命の、ぎりぎりの美しさ。それは一見惨め極みだが、透明な生命の流れだ。いかなる自然よりもはるかに遅く、新鮮に、自然である。かつて人間が悠久に生きつぎ、生きながらえてきた、その一コマであり、またそのすべてを戦慄的に象徴している。ヒューマニズムとか道徳なんていう、絹靴下のようなきめですくえる次元ではない。現代モラルはこれを暗い、マイナスの面でしか理解することができない。だがこの残酷である美しさ、強さ、そして無邪気さ。

よそは知らない。しかしこういう根源的な人間生命が久しい間、そして今日まで、日本とその周辺の世界を支えてきた。沖縄物語を展開する前に、こんな山奥の炭焼きの話をはいたのは、まさにこの島の生活、その基底にこそ、そのような生命の感動が生き続けているからだ。

痛切な生命のやさしさー私の今度の旅行の、これが何より深い印象であった。

だがそれは滞在期間をとおし、この風土にふれるにしたがって、次第に感じとったことである。

➤ 沖縄は失われつつある日本の本質を写す鏡である

ここにはまるで別な天体であるかのような透明な空間の広がり、キラキラした時間の流れがある。私はすでに直観しているのだが、そこはこの旅行の結論として発見した、というよりも、のっぴきならない実体として、からだの幅全体で受け止めたもの。それはまた自分自身を確かめることでもあった。私の予想しなかった、人間の生き方の肌理(きめ)。現代社会のカレンダーによって画一化され、コマ切れにされた時間とその連続。自然に対する畏怖と歓喜をうしななって無感動に測られる空間。そのような生の条件とはまさに異質だ。

そして、それがかえってわれわれ日本人の根源的な生き方にふれてくる。現代日本は己の実体を見失っている。こういう根源的な時間と空間をどのように現代と対決せしめるか、ということが実は日本文化の最も本質であり、緊急な課題なのではないだろうか。

南の潮風とともに、まだ神ながらのにおいが吹き荒れているこの天地では、ふしぎに日本文化の過去、そのノスタルジアがよみがえってくる。感傷ではない。ここを支点として現代日本をながめかえす貴重な鏡なのである。

私は日本、それもその風土と運命が純粹に生き続けている辺境に強くひかれる。そこには貧しいながら驚くほどふてぶてしい生活力がある。その厚みは無邪気で明朗だ。近代化されると奇妙にゆがみ、希薄になってしまった日本人像とは違う。そういう隠れた生命力を掘り起こし、そのポイントからもう一度、日本人として、芸術家として、この現実に対決する生き方を究めたい。

したがって、私がここで展開したいのは沖縄論であると同時に、日本文化論である。

➤ かつてこの島は「琉球は竜宮」なんていって、せいぜい享樂の島として旅行者の好色的対象になるか、あるいは民族学的に貴重な宝庫として注目されたに過ぎない。本質的に日本人の肉体、夢とは結びついてはいなかった。

たとえばゴーギャンが南太平洋のタヒチ島に自由と恋愛の天地を発見した。それは19世紀ヨーロッパの、発展する資本主義の自由と絶望、その世紀末的矛盾への対決であり、告発であった。ギリギリの、己れと、自分の生きる世紀をともに賭けての実験であったのだ。

この島はそういう切実な精神の問題として、また現代的課題に示唆をあたえる設定として、日本の前に浮かび上がってきたことはなかった。なるほど貧困ではあるが自由な天地。このように美しく、豊かな情感にみちた島々について、どうしてうかつだったのだろうか。

➤ 日本人でも、韓国人でも、北朝鮮の女性に深くはまる男性は少なくない。彼らは生まれついでから現在まで、資本主義社会をたった一ミリも経験していない。そんな純真素朴な感覚にひかれるのだろう(初沢亜利)

・ 岡本太郎の沖縄体験

➤ 国際通りの大渋滞

◇ 前の車がどんなに遅く走っても追い越そうとしない。なんでこんなところで止まるのかと思うと、通行人が至るところで道を横断するのだ。そのたびに車は停止して辛抱強く待つ。歩行者はすこしもあわてない。車は無視してゆうゆうと道を横切る。当然という顔つき。なるほど、これはジンドウ的だ。

◇ このテンポは尋常じゃない。その後もこの沖縄のテンポには、とことんまで悩まされ、ノックアウトされた。もっとも日本から一定のスケジュール、われわれの時間の観念を手荷物みたいに持ってきて、沖縄という天地に割り込ませようと一人で地団駄ふんでいる、その方ははるかに滑稽だったのかもしれない。私のような超セッカチには、猛烈極まる忍耐力があったことは確かだ。「すぐ行く」というから、そのつもりでいると、大てい一時間ぐらいは待ちぼうけをくわされる。

➤ 街並・美観

- ◇ 両側の町なみはひどくごたごたしているし、スタイルの統一がない。すべてが無計画に出来上がってしまったので、もうどうにも仕様がないらしい。ちょっと東京の場末といった感じだ。
- ◇ ロビーと食堂をかねたホールも、通された部屋も、妙に疎っぽい。日本でもなければアメリカでもない。むしろマレーあたりの感じだろうか。何とも不思議な趣味の取り合わせである。明治、大正、昭和ともつかない、そんな現実的な時代を超越した雰囲気だ。
- ◇ 部屋付きのバスルームに入って、しかしアツと思った。色とりどりのタイル貼りだが、浴槽の中に一枚、鯉が泳いでいる絵の大きな陶画がはめこんであって、その上の壁にはまた、イタリア・コモ湖の極彩色の風景が陶板になっている。蛇口の上には、四角いタイルいっばいに、水色で「水」と焼きつけてあり、それに並べて朱で「湯」。この全体の何ともいえないスツボケたデザインに、どぎもを抜かれてしまった。
- ◇ 別の和室にはベッドが入れてある。床柱から長押(なげし)まですっかりペンキ塗り、天井板にまでニス塗りが塗ってある。日本建築の天井の楽しさはここでは惨殺されている。
- ◇ どの店も馬鹿に作りが似ている。魚をならべたガラスのケース、カウンターの向こうに白い上っぱりを着たにいちやんがいて、看板を見ると呆れたことに「江戸前すし」。他は、おでん屋、ライスカレー、丼ものばかり。食べ物は何件回ってもまったく同じ。泡盛は一滴もなし。

➤ サービス

- ◇ ホテルの深夜3時、わめき声、歌、口笛、ピアノの音。暁方、騒ぎはようやく静まったが、今度は一本指でポツンポツンとピアノを弾きだした。眠ることを諦めて、食堂に降りて行くと、16・7歳の給仕の女の子がお行儀よく坐って、熱心に、ピアノを弾き続ける。

コノヤロー、と荒々しく卓についたが、彼女は平気で、振り返りもせず叩き続けている。やがて静かにピアノの蓋をしめると、メニューをもって、「何になさいますか」とまったく悪びれた様子がない。

こんなかわいらしい、気の弱そうな目つきをした小娘のたてるバカ音と、夢の中で悪戦苦闘してきたのかと、気がぬけてしまう。

音とお客に対する無智、無神経に腹はたつが、しかしあまりの無邪気さが、逆にかわいらしくなる。

- ◇ ある旅館で「お茶を持ってきてくれないか」と女中さんに頼んだら、「今ラジオドラマを聴いていますから、ちょっと待って下さい」と言われた。

- ◇ とにかく愉快的なサービスだ。気をきかすということは金輪際ない。頼めば何でも親切にやってくれるのだが、そのうち気がついてくれるだろうなんて期待していると、たいへんあてが外れる。さらにタイミングが狂うこと。ちょっと昼飯を食べに入っても、一時間くらい待たされたりする。仕様がなから間つなぎにビールを注文すると、それが食事の終わった後から出てくるという始末だ。

ある所で、「沖縄のホテルのサービスは悪いでしょう。世界一だそうですよ。」というから、私は「悪ありませんよ」と答えた。予期に反した返事に、相手はきよんとする。「だって、そんなモノないんだから」と付け加えたら、みんなワツと頭をかかえた。悪いってのはそもそもすでに何かサービスがあるってことだ、という意味。こいつはシンラツだった。

ところがこれを聞きつけて、ご丁寧にもわざわざホテルに知らせた者がいるらしい。ホテル側はひどく恐縮して、気をつかいだした。その後は大へんなもの。「どうもサービスが行き届きませんで」と繰り返し謝りながら、ハラハラしてついて歩く。この善良な人達は何とも気の毒な気がした。

・ 沖縄「無」文化

- まず、琉球王・尚氏の旧地、浦添ようどれを見た。城の裏山をえぐった横穴式の墓で、700年以前のものだ。沖縄戦では2ヶ月の間、凄惨な激戦が行われ、戦後は文字通り草一本生えていなかったそうだが、墓は修復して旧態を再現している。

洞窟の中におさめられた英祖王の石棺。これは沖縄のいわばとっておきの文化財であり、古典である。棺のまわりの彫り物は、たしかに見事で、過去の沖縄文化の豊かさをしのばせる。しかしそこから響いてくるものは希薄だった。

さらに、霊御殿(たまうどうん)とか、首里城の石造芸術、旧王家の遺品、生活用具などを見た。それらの個性、よさを感じとりながらも、何かもの足りない。つまり、こいつはどうしても沖縄だけにしかない、というような凄みがないのだ。すべてを通じて言えることは、どうも、もとは中国であり、南方であり、朝鮮、日本である。そのあらゆるスタイルがまじっている。いわば借りものであって、沖縄全体がそこからつき出てくるというものでは、残念ながらない。クリエートされた気配、その息吹が感じられないのだ。

そこにこの国の貴族文化のひ弱さ、層の薄さを見とるような気がする。文化の輸入は、磨かれたセンスと経済力があれば民衆生活とかかわりなくできる。貴族だけが外国の結構なものをとり入れるのだ。日本だって、奈良時代にせよ、近世の南蛮貿易、明治の文明開化、いつも外来の先進文化を享受したのはやはり上層支配階級だけだった。このような輸入文化は、リファインされ体裁よくまとまっはいても何となく希薄なのである。沖縄の場合は日本よりさらに一まわり小さいスケールだけに、いっそうそれを痛感する。

さらに民芸の専門家たちに高く評価されている壺屋のやきものにしたって、窯場をいろいろ廻ってみたが、ひどくつまらない。中には悪くないものもあるけれど、それだけのこと。そのやきものを通して、沖縄のエネルギー、その魅力がグンと押してきて、こちらが腰をぬかしてしまうようなものではない。漆器は問題外である。

有名な紅型だってそうだ。京都の友禅よりずっといい。友禅は技術的にはたいへん巧妙だ。しかし型になってしまって、動き、空間性を失っている。赤、黄、青というような鮮やかな原色を絢爛豪華に使っていながら、重く、かえって透明度がない。

紅型の中には何か自由で、明るい流動感がある。優美に流れてゆく空間性。紅型のよさを私は認めるのだが、しかしこれもたいした問題突きつけてくるほどのものじゃない。

古美術からすべてをひっくるめて、なるほど、いいものではある。だがそれはただ、いいものであるに過ぎないというもの。ただ結構なものなんて、つまらない。もっと何でもなくて、凄いものがある。私はそういう「いいもの」だとか「結構」だなんてカテゴリーを乗り越えて、無条件に迫ってくるものを、私の目で発見しようと思って来ているのだ。この程度の手がかりでは正面きって文化論を展開する気にはなれない。

- わたしはまるまる一週間、島内をかけずり廻った。みるべきところはほとんど案内してもらったのだが、結果は予期に反した。いわゆる「文化」というべきもの、はっけんとしてグンとこちらのぶつかってくるものがないのである。景色は超現実的に美しいのだが、自然がいくら美しくたって仕様がなない。もちろん結構なことだが、それはなにも沖縄人のせいじゃない。向こうが勝手にそうできているんだ。

離島をめぐり、石垣市内を探検、さらい竹富島までいったのだが、香り高いまで淡々とした風物の間を、身体だけが通り抜けてしまった思いだ。

ここでもまた実体として抵抗してくる琉球文化はない。文化財指定の桃林寺、珊瑚礁の石を使った宮良殿内(どうんち)、石垣殿内の桃山風の庭園なども、まあよくできたといだけのもの。

・ 沖縄の「手応え」

- ぶつかってくるものがないとはいった。しかし、この旅行をとおして、いつも奥深くひびいてくる手応えはあった。第一に、石垣。ごつごつとした珊瑚礁の石を不細工に積み上げ、烈々と白い日差しの下でそれは重く、けわしい。夕日をうけると、異様に軽く、人肌のやさしさを想わせる。強烈な印象だ。

周期的に襲ってくる台風に根こそぎもっていられないため、どの家のまわりにも積み重ねられる。石積みの技術、ていさいなんて問題じゃない。石は不揃いだし、てっぺんはデコボコ。幸い珊瑚礁の石はギザギザで、無造作に積まれてもがっしりと安定している。

身を守る最低の手段として、美しさ、見栄など考えてもいないのに、結果は偶然に美しいのだ。いや、偶然ではない。生活の必然から、あたかも自然そのもののようによ出来上がってしまったからなのである。

またハダシ。道を歩いている人たちの裸足はひどく魅力的だ。大地に生き、永劫に切りはなされない人間の運命。しなやかで、逞しいくるぶしだ。生命のひびきが大地とじかに通い合う。

服装だって同じことだ。着の身着のまま。よごれて、破れている。細いひもで前を結んだだけ。身ざれいではないが、その姿は美しい。殊にお婆さんの素晴らしさ。みんな元気で、まめまめしく働いているが、顔は皺だらけ。深く深く刻み込まれている。ちょうどこの島の年輪がそのまま全身にやきつけられているという感じだ。また若い娘さんでも、口紅もお白粉もつけない素肌の顔である。見られている、見てもらうなんて虚勢がみじんもない。環境の中で、手放しに充実している。

頭にのせるクバ笠、籠、そういえば、頭上の丸い板に豆腐を一丁だけおせて売って歩いている若い女を見かけた。まことにこの島でなければ見られない風俗で、ほほえましい。

これらのすべては美しい。意識された美、美のための美では勿論ない。生活の必要からのギリギリのライン。それ以上でもなければそれ以下でもない必然の中で、繰り返し繰り返し繰り返され、浮び出たものである。

特定の作者、誰が創った、はない。島全体が、歴史を結晶して、形作ったのだ。これは生活のギリギリの必需品である。それ以上でもなければ以下でもない。籠だって、それがなかったら、食糧を運ぶこともできないし、生産したものを交換することもできない。お茶のパーティーに行くために、しゃれて頭に載つけるニューファッションじゃない。それなしでは生きられない、のっぴきならない必要によって、生存の証しとしてそこにある。そういうものだ。

・ 二種類の文化

- とかく「文化」というと、高度な成果を目安にする。たとえばエジプト、ギリシャ、ローマの文化、その神殿、彫刻、ルネッサンスの学芸、東洋では殷・周の青銅器、随・唐・奈良の仏教芸術といった、絢爛たる過去の宝物。

殷の青銅器など、私は何よりも圧倒的な感動をうけるのだが、あの凄みのある美観は古代帝国の巨大な権力、王が死ねば、隊長以下、数百人の兵士、馬も戦車も、編成のままそっくり揃えて、ともに埋葬してしまう、こんな現代ヒューマニズムから考えると、恐ろしさに身の毛のよだつような、非人間的専制権力をバックにして結晶したものだ。またピラミッド、スフィンクスの沈黙の下には、数百万の人間の労苦と叫びが埋もれている。その他、ギリシャ、ローマ、日本だっていい、古典文化の素晴らしさ、絢爛たる豪華さ、また力というものは、必ずそれを生み出すユニヴァーサルな権力を背景にし、それを象徴し、裏付ける。権力と世界観がマテリアルに定着され、物化されたものだ。富と権力にものをいわせ、えり抜きの職人に、みがきをかけた技術をつぎこませて、美と権威を誇示したもの。ありあまった贅沢、余剰なエネルギーの奔流であり、決勝なのだ。

それは文字通り虚飾である。しかしまた、そこには生活から切り離された凄みがある。非人間

的ともいえる誇らかな相貌に、逆に人間の深い、激しい本質が現出する。虚飾のエネルギー、その豊かさ、情感。また帝国主義的、挑戦的ロマンティズムなど。

西欧近代は古代中近東、地中海文化の初源的な感動から出発し、それを土台として中世、ルネッサンスを経て結晶した。中近東、ギリシャ、決して単純にはいえないが、たとえば石という、堅牢さを土台にした世界観。それはすでに文化の不朽性への呪文であり、強固さは明確と構成を暗示する。きめはあらいが、スマートだ。そこに生活の素肌の感動を受け止めることはできないのだ。

- 一方で、こちらにあるもの、その肌合いはまったく異なっている。ぎりぎりの手段で生きる生活者の凄み、美しさがある。絶体絶命の生命の流動のようなものが、島々の歴史を久しい間支えて来た。長い歴史の間、地面にへばりついた植物のように、自然そのままに生きてきた。台風に吹きさらわれ、破れ、自然に朽ち、風化し、しかし新しい芽がその下からしっかりと生え育ってくる。そして同じ運命をくり返したどって行くのだ。

それは淡々と擬態ない。堅牢だとか、永らえることが価値だなんて、考えもしない。この世界では物として残ることが永遠ではない。その日その日、その時その時を、平気で、そのまま生きている。風に耐え、飢えに耐え、滅びるときは滅びるままに。生きつぎ生きながらえる、その生命の流れのようなものが永劫なのだ。

柔軟で、きめの細かい肌合い。素朴で、もろく、はかないようだが、強靱なのだ。これは中近東、地中海文化圏の初源的な感動とはまったく異質な強さである。この天地にあふれているものは、明朗であり、屈託のないのびやかさだ。

断っておくが、石垣やクバ笠を美的価値、文化的価値として再認識すべきだといっているのではない。問題は石垣や裸足やクバ笠ではない。その美しさなんて、本質的にいってそんなもの、あろうがなかろうが、どうでもいいことなのだ。ただそれが媒体となり、それを通して直観し、感じとる、永劫、なまなましい時間と空間。悠久に流れる生命の持続。

とかく民芸趣味のように、ひなびた趣として喜んだり、近頃はやりのグッド・デザイン的観点から、無駄のない機能的美しさに関心したりするのもいいが、問題の筋が顛倒している。

美しいものであっても、美しいとはいわない、そう表現してはならないところに文化の本質がある。生活そのものとして、その流れる場の瞬間瞬間にしかないもの。美的価値だとか、凝視される対象になったとたん、その実体を喪失してしまうような、そこに私のつきとめたい生命の感動を見とるのだ。

初めに引用した残酷物語、夕日があかあかとさしている、飢えた炭焼き小屋の戸口で、子どもたちが斧を研いでいる。小さい手のうちで刃がキラリと光る。その光の中に悠久があらわになる。

・ 八重山の悲歌：芸能の本質

- 八重山では廃藩置県後も、明治27・8年まで、普通の人頭税制度が実施されていた。正式に廃止されたのが明治36年。以後はじめて平等の日本人として生活できるようになった。

近世以降の八重山は天災と悪疫にいためつけられたうえ、むごい税の負担に喘いでいた。それは限界をはるかに超えていた。王府は収奪を確保するために、おどろくほど細密な動労規則を設け、体刑・鞭で監視した。徹底的な連帯性を強行する。年貢米は勿論、48種の物納の税も村単位で集められ、一人でも納めきれないものがあれば他のものがそれをひつかぶらなければならない。首里の王府までそれを運ぶ船が難破すれば、その分は未納として追徴された。

◇ 石垣の強度歴史家喜舎場氏：

「昔の百姓は、そりゃかわいそうなもんでした。夏でも冬でも、芭蕉布、木綿の膝つきりの布子一枚、縄の帯を締めて、朝から晩まで働きに働いて、王様に税を納めるために生まれ

てきたんだ、と諦めていたもんです。

上納の布を織るときには、女たちを集めて、役人がつきっきりで監督する。首里からは、とても考えられないほどむずかしい、こんな柄どうしたら織れるのかと呆然とするほど手の込んだ柄見本をつけて指定してくるので、一日かかって一尺(約30センチ)も織れない。泣き泣きやっと織り上げて、納めるときには、広場に竿をわたして、一反(およそ一着分)ずつ反物をかけて、めがねをかけた役人が毛ほどの傷も見逃さぬ検査をする。少しでもダメが出たらはじめから織り直し。村の全部が合格しないかぎり、収まったことにならないのです。年貢米でも、縄でも材木でも、みんなそんな風にして集めたもんです。

だから収納切(しゅんのうきり)といって納税が済んだときには村じゅう大祝いで、女たちは気違いのようになって踊りくるい、酒を飲んで、この世の終わりのような騒ぎでした。」

◇ 納税の労苦は数多く歌い込まれている。あしやげ節、布晒(ぬのさらし)節・・・

- 離島が発展しなかったのは、猛烈な風土病のせいだった。石垣島、西表島など八重山群島はひどいマラリア地帯で、全村死滅という悲惨が絶えなかった。首里王朝はしばしば他の島から強制移住させたが、すぐまたやられる。移住しては全滅という残酷な歴史を繰り返してきた。今度の戦争でも、3・4千名も入った日本兵がほとんどマラリアで死んだと島の人はいう。

◇ 悪疫のために人口が激減したり、全滅する村があったりすると、税額を確保するために役人はそこへ他所から強制移民を強行した。いったん移住と決まったら、絶対だった。深く結びついた生活の実体が無神経に、官僚的に、一切の事情を構わず、村の中に一線を引いて、ここからは移住、こっちは残る。まるで人間の生身を、ここからは腕、ここからは首、下腹と断ち切るように引き裂いたのだ。

このような無慈悲極まるシステムを実行する役人たちの権限は絶対であり、横暴なものも多かった。島々を巡って美しい女が目につくと、直ちに召し上げる。また貢ぎ物取り立てのため沖縄本島から出張してくる役人たちを歓待するためにも、よりすぐった乙女たちを揃えて侍らした。

このような社会の中にあって、それは島の経済を救うことでもある。役人の妾になれば、税を免ぜられるという特権がある。子どもが生まれれば、その子は士族である。逆に、島民たちは役人の見回りという、娘たちをできるだけ美しく装わせて、わざわざ家の外で機を織らせたりして、おめがねにかなうのを待った。

- 八重山では民衆は文字を使うことを許されなかった。生産や納税に欠くことのない数字さえも、藁を編んだ独特の結縄文字で計算し、記録した。だからあらゆる物語、伝統は文字でなく、朽ちから口へ語り伝えられた。それが今でも民衆の間に歌い継がれ、この島の響きになっている。文字のないゆえに、いいたいことが逆に先鋭になるのか、驚くべき表現がある。虚飾のない、ギリギリの感動を伝えてくる。

◇ 「恋し合っている若い二人があった。男が強制移民で遠く離れて行かねばならなくなった。いっしょにやって欲しいと願ったが、どんなに頼んでも集落が違うので許されない。いよいよ別れる前の夜、恋人たちは山に上った。いつも忍び逢っていた石の上で、一晩中悲しみあった。泣きながら二人は石を叩いた。夜が明けて、見たら、石に二つ穴があいていた。そのくぼみは女の方が深かった。」

こんな美しい悲しみ、こんな純粋な話を、私は知らない。さりげない単純さ。たとえばギリシャ悲劇などの、天地が動揺するような慟哭の悲劇に比べて、このくぼみはどんなに小さく、ささやかであるか。だからこそまた痛切である。単純で、底抜けに無邪気、しかも絶望的になまなましい嘆きを打ち出している。

女の方が深かった、それは執念でも、諦めでもない。いのち自体、そのたしかめであり、その悲しみの深さである。女における人間の運命、そして沖縄自体が、そのくぼみに現れているように、私には思える。

ここにはこういう激しい悲しさを見事に昇華した無数の歌、言葉、文学がある。八重山は恋の国、歌の島として名高い。沖縄本島で歌われる琉歌の中にもこちらから伝わったものが多い。

- ◇ この表現力の強さ、正確さ。そしてかなしさ。新鮮な、驚くべきイマジネーションである。超現実的な近代詩を見るようだ。といてこの純粋なロマンティズムは作られた形式ではない。人間の情熱、生命のはりに直結している。それがさらに感動的だ。万葉集などの表現力に対比しても、はるかに激しく、豊かではないだろうか。

ぎりぎりに哀愁をぬりこめた、嘆き、訴え。それは叫びの極限まで、いのちを振り絞ったという感じだ。役人に追われて逃げる若い女が、悲しみのあまり石になってしまったという伝説をきいたが、歌い手がもうちょっと叫び、歎いたら、そのままほんとうに石になってしまうのではないかとふと戦慄するほど、迫ってくるのだった。

だがそれは、にもかかわらず全体にのびやかな諧調を失っていないから驚くのだ。悲哀を絶叫しながら、ゆるやかに流れる。それが本当の音楽なのじゃないか。

人間の声は素晴らしい。歌というと、われわれはあまりにも、作られ、みがきあげられた美声になれてしまっている。美声ではない。叫びであり、祈りであり、うめきである。どうしても言わなければならないから言う。叫ばずにはいられない、でなければ生きていられないから。それが言葉になり、歌になる。ちょうど生きるために動かさなければならない身体の運動と同じように。ギリギリの声なのだ。

- 人頭税の重いノルマ、その達成にこぎつけるには、ひとりひとりばらばらではとてもできない。そこで徹底的に共同作業が行われた。それをユイマールと言う。田植え、草取り、刈り入れ、米つき。足りない人手で大きい労働をしなければならない。そのときに、皆が歌った。

- ◇ ありったけの人数を田圃にずらりと並べ、指揮者が真ん中で音頭をとる。それを「イゾウ（気合い）」といて、その音声は厳粛を極めた。明治末頃までは実際にそうやって仕事していたそうだ。

なんとも例えようのない、怪鳥の鳴き声のような、その突拍子もない声に私はびっくりした。はじめ、ひどくゆっくりしたテンポで、働き手の調子を揃え、だんだん急調子に早まって行く。

その指揮者の声に、めいめいが勝手に「ヤッ」「ホ」「ヒェツ」と掛け声をかける。その切迫感。不思議なセンセーションをあたえる音楽だ。

イゾウがはじまれば列から離れることは許されない。少しでも遅れると、指揮者にいやというほどひっぱたかれる。昔は庶民の女は越中禪のような黒い下帯をしめていた。それがずりおちても、前にはさむひまさえない。禪を後に引きずりながら、夢中で進んで行ったということだ。

こういう形で掛け声をかけると、黙ってただ働くより確実に2・3割ははかどるという。これはだから芸術とか音楽なんてものじゃない。美学ではないのだ。生産のリズムであって、それに乗らなければ仕事は進まない。

労働の歌の中に、さまざまの悲しい言い伝え、物語が織り込まれた。八重山では百姓はあんまり辛くって悲しくって、その鳴き声が歌になったといわれているが、詩の中の女や男の悲歎に、自分の運命を重ねあわせて泣きながら、彼らは重すぎる仕事に耐え続けたのだろう。

だがそれはまた生きるハリでもある。ただ悲しいだけだったら、ふたたびは歌われまい。絶望的な哀調をくり返しくり返し、何百千度も歌って、飽きないとすれば、ネガティブな表現をとっていても、それはまた逆に生きることの確かめであり、その証し、生き甲斐だったと言っているのではないか。

- この土地に「物」として抵抗してくる文化がないのは当然だと思える。それは文化の欠乏でも精神の貧困でもない。この貧困と強制労働の天地に、文化とか芸術が余剰なもの、作品として結晶し、物化するという事はできるはずがない。ゆとりはみじんもなかった。そんな時間、エネルギー、富の余裕はない。

ただ、歌、踊りは別だ。それは生活そのものであり、それなしには生産し、生きることができなかったのだ。ここでは、そのように物ではなく、無形な形でしか表現されなかった。

制度によって、生活すべての余剰、瓦屋根も、よい衣装も、文字さえも禁じられていたのに、歌と踊りだけは許された。ということは実は何も与えられていなかったと同じことだ。それは端的に八重山の悲劇を象徴している。

しかし何もなく、音声だけが響き、また消えて行く世界の素晴らしさというものがある。私は思う。「作られたもの」のいやたらしさ。人類は過去にいくに多くの無効になったものを、不潔な遺産として残していったか。私はもののいのちは作られた瞬間にうち壊されるべきであると思う。

- 私はこの報告によって、人間の純粋な生き方というものがどんなに神秘であるか、その手応えを伝えたかった。それは生きていく自分の土台を確かめる情熱でもある。

・ 沖縄の近代化

- 方言と片付けるにはあまりに貴重で美しい。万葉の古代日本語から、鎌倉ごろの言葉がここでは生活の中に生き、残っているのだ。それが標準語運動のもとで、無下に卑しめられ、抹殺されようとした。

また、固有の芸能、その伝統は、異民族の番風なみに白眼視された。素晴らしい踊りも、民謡も、禁止に近いまでの圧迫が加えられた。腹が立つのを通りこして、馬鹿馬鹿しくなる。

日本の官僚主義は沖縄のよさを、すべて、システムティックにぶちこわそうとしたのだ。もっとも人間的に卑しむべき、危険な政治だ。私はこの残酷な話を聞いて、激しい憤りを抑えることができない。

沖縄人がこの島で、沖縄人として生きることを許さなかったのだ。「皇民化」という屈辱的な名目のもとに、まるで蕃族のように沖縄本来のものを圧迫し、官僚的な画一主義の枠にはめこもうとしたのである。

私は人間が死ぬなんて、たいしたことだとは思わない。そんなことに馬鹿騒ぎするヒューマニズムをむしろ腹から軽蔑している。しかしこういう事実を中心とした卑劣、不潔さは絶対に赦せないのだ。

・ 現代沖縄の課題

- ところで人頭税のことだが、歴史かもこの島の文化人も、誰でもその悲劇を強調する。この島にはたまたま「人頭税」という名のシステムがあったから、特別にドラマティックで、イカセル。事実そうだったのは解るが、しかしそういう過去を振り返って、現在の自分は何も背負わないで、可哀想だなんてぬけぬけ同情したり、逆に財産みたいに振りまわすのは、卑しい。私はある席で、話しあっているうちに、何となく腹立たしくなってきた。そこで無遠慮にぶつけた。

「みなさん、人頭税、人頭税と、まるでとっておきの文化財みたいにおっしゃるが、そんなこの島の専売特許みたいにされたんじゃ、かなわない。」

まともに生きていく人間は誰だって、何らかの形で人頭税をしょっている。人間のいきるってのはそういうことだ。

➤ じっさい、明治末期に悪法が廃止され、八重山が解放されてから、ではいったいこの人たちは何を生み出したというのだろう。今日なおすべて美しいものは、過ぎた時代の思い出である。自由になってからはかえって悲惨な過去に生命の幻影をかずけているだけのように見える。あの悲歌だって、かつては生命のハリを支えたのに、いまはそれがただ回想として、マイナスの向きにしか働いていない。皮肉ではないか。

➤ 沖縄タイムスの豊平さんがしみじみと私に言った、沖縄は戦争によって何もかもなくしてしまった。滅びなかったのは、わずかに踊りとか歌のような無形の文化財だけだった。そして今日のわれわれに沖縄人としての誇りを与えるのもそういう文化・芸能しかない。だが古いものはどんどん失われて行く。なんとかしてこれを守らなければならない。

彼は実際にそれらの保存、復興に情熱をかけて、文化運動を展開している。

その努力には打たれる。だが、それはつまりは過去の結晶である。生き甲斐のイリュージョンであって、現在の充実ではない。歌とか踊りというものは、生きる、その充実のほとぼしりであって、その瞬間に叫び、その瞬間に舞えばそれでいい。音として消え、形として消えるものなのだ。ながすのだ。惜しみなく。

私は沖縄人に、結果ではなく、そういうものを生んだモチーフ、生命の感動を取り返すことをこそ望みたい。現代の沖縄の現実、世界の歪み、そのせつぱつまった恐縮の中にある。かつての沖縄人が苦悩の歴史を歌い上げ、踊り抜いて乗り越えたように、しかしまったく別の形でこの矛盾を克服しなければならないのではないだろうか。どういうやり方、どういう方向に、それは沖縄人自身が、生命のエネルギーによって発見し、解決して行かなければならないのだ。

➤ 本土復帰にあたって

沖縄の本土復帰、ほんとうに喜ぶべきなのかどうか、言いようのない疑念が残る。私のように久しく沖縄に惹かれ、しばしば訪れてあの透明で美しい島の風土と文化に身近に触れた者には、いま沖縄の置かれている運命、その危険な重さが、我が身にものしかかってくる思いがする。

私は沖縄の人に言いたい。復帰が実現した今こそ、沖縄はあくまで沖縄であるべきだ。沖縄の独自性を貫く覚悟をすべきだ。決して、いわゆる「本土なみ」などにはならない、ということ。

沖縄の復帰は嬉しい。しかし現実的には様々な問題がある。いわゆる本土の人間が、ただ領土という感覚でなくこのことをもっと骨肉にこたえて感じとるべきなのだ。

経済発展とか開発が無条件にプラスであり、幸福をもたらすと考えられた時代は毛終わっているのだ。本土が戦後25年、あくせくと働き通してGNPをあげ、いまその結果の矛盾にぶつかって、絶望している。俗にいう「生活の豊かさ」、しかしその反面、失ったものがいかに大きいのか。

これから「戦後」に出発しようとしている沖縄の人たちは、自分自身の生き方の問題として方向を決定しなければならない。ずるずると流され、本土流の考え方にまき込まれて、あの美しい自然も、心も、気がついてみたら荒廃しきっていた…そうなる危険は、誠に大きい。

この島独特の表情。決して豊かではない小さな島々で、台風にさらされながら、穏やかで逞しい人々が素肌で、自然とともに生きて、ながい生活の間に作り上げた分厚い伝統。民謡にも踊りにも、民具、石垣、あらゆる生活的な造形にも、それはにじみ出ている。そして何よりも沖縄の人のいのち、その肌あいこそ、世界に稀な、すばらしさなのだ。

この著書(『沖縄文化論』)を書いたのはもう10年も前になるが、この素っ裸の島の凄み、美しさ、感動はいまもって変わっていない。一見「何もない」文化の本質、意味を、沖縄の人は今こそ、もっと強烈に自覚してもらいたい。そして本土流の卑しい常識、物を持たない、裸であることが恥ずかしいことであるというようなものをさわやかに吹き飛ばして欲しい。沖縄の再出発を、政治・経済だけでなく、文化、生き方の問題として考えて欲しい。

文化はその土地、自然の環境の中にひらくものだ。そして独自の性格をもちながら、異質とぶつかり、変貌し、しかしそれぞれが己を貫き、ユニークにひらいて行く。

- 沖縄は本土とはまるで違っていながら、ある意味ではより日本である。

皮肉な言い方に聞こえるかもしれないが、私は文化のポイントにおいては、本土がむしろ「沖縄なみ」になるべきだ、と言いたい。沖縄の自然と人間、この本土とは異質な、純粋な世界とのぶつかりあいを、ひとつのショックとしてつかみ取る。それは日本人として、人間として、何がほんとうの生きがいであるかをつきつけてくる根源的な問いでもあるのだ。閉ざされた日本からひらかれた日本へ。

だから沖縄の人に強烈に言いたい。沖縄が本土に復帰するなんて、考えるな。本土が沖縄に復帰するのだ、と思うべきである。そのような人間的プライド、文化的自負をもって欲しい。

この時点で沖縄に対して感じるもの足らなさがある。とかく当局者も一般の中にも、本土に何かやってほしい、どうしてくれるのか、と要求し期待する方にばかり力を置いている人たちが多。何をやってくれますかの前に、自分たちはこう生きる、こうなるという、みずからの決定、選択が、今こそ緊急課題だ。それに対して本土はどうなんだ、と問題をぶつけるべきなのである。

私はナショナリズムを強調するのではない。島は小さくてもここは日本、いや世界の中心だという人間的プライドをもって、豊かに生きぬいてほしいのだ。沖縄の心の永遠のふくらみとともに、あの美しい透明な風土も誇らかにひらかれるだろう。

・ 現代とのギャップ

- 現代社会は時間によって区切られ、いつも追いかけられる。しかもさらにこちらの方からそれに追いつこうとして焦るのだ。瞬間瞬間はかえって空虚になる。

この旅行から半月ぶりで東京の我が家に帰ったとき、ほとんど乱暴ともいえる肌触りで、このずれを感じた。

この目まぐるしさはどうしたものだろう。文明開化以来、時計の針に一生懸命追いつこうとした後進国意識、その焦りが身に付いてしまったのではないか。どうも本当の生き方ではない。生命のリズムと時計の針との違和感。というよりも、生命自体が画一化しているということだ。ただ空しく一方的時間にのまれてしまっては、生きている甲斐がない。

- しかし時空を超越して、食べたいときに食べ、勝手なときに眠り、目が覚めたら偶然そこにお日様があがっていた、というような、また人と会う約束なんかもしない、つまりユーキューの時間に生きようなんて、とぼけた決心をしたって、現代社会では許されない。

どうしたら二つの矛盾する時間をそのまま捉え、生命の充実を取り戻すことができるか。問題は組織された社会の、組織された時間の中に、この初源的な感動の持続をいかに盛り込み、活かすかということだ。▶ サンマリーナの挑戦。

- 現代芸術はその一般的官僚化、小市民化に対しての告発であり、失われた時間の奪回である。それは人間生命の暗闇から根源的な感動をひき出し、純粋な形で叩きつけようとする。この沖縄の裸足や石垣、その生命の持続に感動すれば、血の中に同質の時間が流れはじめる。

この直観がどのように実体となって生活の中に流れ出てくるか。たとえばその感動は芸術家であつたら作品の中に、当然あらわれるはずだ。

3. 文化とは「必然」である

- ・ 文化の本質
 - 文化の本質は形ではない。
 - 社会環境や、自然や、経済的な理由で、どうしてもそうでなければならない、ギリギリの生き方、その必然が、結果としての文化を生み出す。
 - 人間が「生きること」を賭けて自分を生きた足跡。軍用地主の生活から、補助金漬けの社会から文化が生まれない。☞ あるいは補助金文化というべきか？

- ・ 沖縄が自ら生産性を生み出した時代
 - 『沖縄文化論』で描かれた庶民のギリギリの生活
 - 1945年の終戦から6年間、与那国、石垣、糸満を拠点とした密貿易時代
 - 1960年から1975年までのベトナム戦争時代におけるコザ時代

- ・ 密貿易時代
 - 沖縄には、「唐世」があり、「ヤマト世」があり、敗戦後の「アメリカ世」から、復帰後の「ヤマト世」と、時の統治者に翻弄されるだけで、自らの時代である「ウチナー世」はなかったといわれる。しかし、誰の支配も受けず、誰の手も借りず、占領軍に対抗して自分たちの持てるエネルギーを存分に発揮して生き抜いた密貿易の時代こそ、「ウチナー世」ではなかったか。
 - 概要
 - ◇ 1945年の終戦から6年間、与那国、石垣、糸満を拠点とした密貿易時代。沖縄中がヒステリー状態になったように、子どもから老人までこぞって密貿易にかかわる異様な時代。混乱、詐欺、陰謀に明け暮れながら、しかし冒険の時代。誰にも拘束されないかわりに、才覚と度胸ひとつで大金をつかむことができた時代。「貧しかったが、夢があった」時代。
 - ◇ 終戦後の一時期、糸満市は沖縄一の都市となり、大糸満市と呼ばれたことがあった。
 - ◇ 終戦後の惨憺たる沖縄は、着るものも食べるものも住む家もなかった。沖縄には、日本本土攻略を想定して、半年以上戦闘を継続できるだけの膨大な物資が集積されていた。それをキャンプ内のあちこちに野積みしていた。戦車でもトラックでも故障すれば乗り捨てるほど有り余っていた。一方で、台湾も空襲を受けたとはいえ、沖縄の比ではなく、豊かな物資があった。沖縄本島に比べて生活レベルに格段の差があった。食べるにも事欠く沖縄にはこんでくれればよい。
 - ◇ ところが、沖縄では1950年まで、戦後5年以上対外貿易が禁止され、鎖国状態におかれていた。人が飢えているのに食糧の移動を規制するといういびつな状況に対応するために、自然発生的にはじまったのが密貿易である。
 - ◇ GHQ は日本本土の占領に専念するため、沖縄配属の有能な人材を日本本土に転属させた。優秀なものから、東京 GHQ、横浜第8軍、フィリピン、琉球軍司令部と配置され、そこでもはねられた兵隊は、軍政府に送られた。当時の沖縄は無能な将校のはきだめといわれ、それが甘い統治を生み出した。軍紀では世界中に駐屯する米軍の中でも最低と思われる1万5千の米軍沖縄駐屯部隊が、絶望的貧困に喘いでいる60万人の住民を統治した。
 - ◇ 与那国へは、台湾から米、お茶、鯉節、ペニシリン、ストレプトマイシン、砂糖、ビーフン、サッカリン、ポンカン酒など。香港からは米、小麦、電球、靴、ペニシリン、あめ玉、菓子、ミルク

ク、日用雑貨など。日本本土からは瀬戸物、鍋、釜など日曜雑貨、書籍など。沖縄には交換するものがなかったため、大量の物資を保管する米軍キャンプからありとあらゆるものを盗んできては、「センカ(選果)」としてこれを輸出した。ラシヤ、タバコ、毛布、HBT(兵隊の作業服)、非鉄金属、ライター、ガソリンなど。あるいは、沖縄中で遺棄されていた古タイヤ、生ゴム、飛行機部品、銅線、機械類、葉莢など。

- 与那国から沖縄に運ぶと2倍に売れ、沖縄のものを与那国に持ってくるとまた2倍に売れる、つまり、往復するだけで4倍になった。
 - 本土と沖縄を漁船で一航海すれば、200万円以上の利益があったといわれる。現在の通貨価値では数億円になる。
 - 当時学校の先生の給与は、タバコ1ボール(1カートン、250円)分といわれていた。
 - ストレプトマイシンは一本1000円で仕入れ、日本本土で5000円で売れた。
 - ラシヤのズボンは糸満で800円で仕入れ、与那国まで運ぶと2000円で売れた。背広は1着1500円で仕入れたものが3500円で売れた。
 - 4万斤(1斤=600グラム:2.4万トン)の葉莢なら、1斤15円で60万円。これを香港売却して砂糖や電球などを買ってくれば400万円から600万円と、約10倍になった。同じく4万斤の葉莢を小麦と交換すれば1万袋(葉莢4斤=小麦1袋60キロ)となり、沖縄で1袋2000円で売れた。総売上は2000万円と、約30倍である。
 - 1950年の沖縄タイムスの沖縄の長者番付「南部に偏る大金持ち」、によると、沖縄一番(31万5千円)、三番(21万5千円)の高額所得者は糸満の漁師である。那覇・糸満地区は、所得10万円以上が21名ランキングされている。
- ◇ 貿易対象範囲は、台湾、香港、マカオ、上海、与那国、口之島、鹿児島、神戸、横浜など。
- ◇ 昭和24、5年(1949、50年)までの久部良(与那国)は、今の国際通りのようだった。料亭、飲み屋なら50軒。沖縄、本土、台湾、中国大陸から久部良に人が集まってバーターしてゆく。人口が爆発的に増えて、推定2万人を超えたといわれる(2004年現在1,749人)。最盛期には2000人の中国人が久部良に居て、中華料理店は大いに繁盛した。沖合の船から眺めると、町の灯は海を照らし、さながら闇の中に黄金を撒いたかのように映えた。東シナ海にこつ然と現れた黄金のように輝く久部良を、当時の人々は「第二の香港」「東洋のハワイ」と呼んだ。
- ◇ 与那国では沖縄本島や八重山で流通してたB円、日本円に加えて、ドル、台湾銀行券、米軍人以外は所有できないといわれていたA円(A型軍票)が乱れ飛び、島全体がブラックマーケットと化していた。

➤ 金城夏子

- ◇ 米軍政府から密貿易の頭目と見なされるほど、旺盛な活動のみせ、密貿易の終焉とほぼ同時期に38歳でこの世を去る。終戦当時、20歳以上の沖縄人なら、夏子という名前に聞き覚えのない人はまずいない。それほど著名な女性にも関わらず、戦後史の歴史には、一切登場しない。沖縄県立図書館から県公文書館まで、記録は皆無。
- ◇ とても不思議な人だった。船をチャーターするとき、あの人頼むとどんな頑固な船乗りでもけっして嫌とはいわない。大の男でもハイハイときいてしまう。だからといっておべんちゃらをいう訳でもない。これを何時までに運びなさい。荷物は明け方までに下ろしなさい……。ことばは簡単明瞭。早口で男っぽくて、ぶっきらぼうで、命令口調。敬語は使わない。ただ、言葉はそうであっても、あの人とはどんな相手でも見下したりはしなかった。一生懸命働いてくれた相手にはごちそうしたり品物をあげたり。困っている人には他人からお金を借り手でも貸してくれるほど面倒見がよかった。
- ◇ 夏子が密貿易で稼いだお金は、当時の金額で数千万円。現在の推定価値で100億円前

後は稼いだと思われる。夏子はこのお金を、これぞと思う人物に無担保で貸した。夏子が死去したとき、机の引き出しから段ボール箱一杯分ほどの借用書が出てきた。

- ◇ 今振り返れば、夏子さんは私たちに夢を与えてくれたと思います。努力すればそれだけ報われるという夢。夢があったから、ちっとも怖くなかった。今でもわくわくしながらあの時代を思い出すのは、この夢があったからだと思います。

・ コザロック

- 喜屋武マリー： 戸籍名、喜屋武眞理子、昭和26年(1951年)8月19日中城村で出生。父親はイタリヤ系アメリカ人軍人。マリーが出生前に朝鮮戦争で戦死。16歳で喜屋武幸雄と結婚、出産。
- 喜屋武幸雄： マリーより9つ年上。昭和17年(1942年)1月27日生まれ。昭和43年(1968年)マリーと結婚。
- 1965年、ベトナム戦争でアメリカが北爆を開始して本格介入。この年が沖縄ロック元年。全盛だったベンチャーズが来沖し、沖縄で爆発的なエレキブームが盛り上がり、喜屋武幸雄と宮古出身の川満勝弘(勝ちゃん)を両輪とする、沖縄一のエレキバンド「ウイスパーズ」中心にロックが芽生える。1969年頃のAサインバー全盛時代を経て、1975年前後「紫」「コンディション・グリーン」らに代表される沖縄ロックの黄金時代を迎える。1976年、「マリーwith メデューサ」デビュー。
- ベトナム戦争で使用された砲弾爆弾は、第二次大戦でアメリカが世界各地で使用した量の3倍。アメリカがベトナムに送った兵力は、延べ250万人。戦死・不明者6万人、負傷者30万人以上。
- 基地の町にあふれる帰休兵相手に稼ぎまくるAサインバー。バケツにドル紙幣を突っ込んで、あふれるたびに足で踏んで詰め込む。とても金庫には収めきれず、ドラム缶に押し込んだ。一般サラリーマンの月給が50ドル前後。下手なバンドでも月に1000ドル、ウイスパーズは4000ドル近い金(現在の数千万円?)を稼いだ。
- 沖縄ロックのメンバーは、ハーフが多い。いじめられ、疎外されていた鬱積と孤独がアメリカ音楽にはけ口と自己表現を与えていた。死に戦慄するアメリカの若者と、沖縄社会から疎外された若者とが、共通の高揚と陶醉を抱いて一体化する。
- アメリカ兵は、下手なバンドが立つと、ビール瓶を投げたり、物が飛んでくる。アメリカなんてみんな大嫌い。しかし、アメリカに受け入れられなければ飯が食えない。

・ 沖縄基地経済の基本構造

- 1949年8月ソ連が初の原爆実験成功、同年10月中華人民共和国成立によって、アメリカの国際戦略が、マーシャルプラン(ヨーロッパ復興計画)や、日本経済再建四カ年計画など、反共路線に大きく転換。沖縄は「太平洋のキーストーン(要石)」と位置づけられ、5800万ドルの予算を組んだ、恒久基地建設計画が実行に移された。沖縄に軍工事ブームがもたらされた。
- 1949年10月、沖縄米軍政長官に着任したシーツ少将は、「太平洋のはきだめ」と呼ばれていた原因となった無能将校や軍属を一掃。沖縄民間企業の設立を積極的に進め、琉球海運、沖縄食糧、琉球石油など、あるいは琉球大学が設立されたのはこの時である。
- 密貿易によって、ヤミ商人が琉球列島内にもたらしたお金は、当時の軍政府が発行した B 円軍票よりも多かったともいわれ、そのために沖縄本島は激しいインフレに悩まされた。さらに、終戦直後、日本本土にはまだある程度の生産基盤が残されていたのに対して、沖縄は徹底的に破壊された。この廃墟の島に5000万ドルを超える「ドルの雨」を降らせば、激しいインフレは必至だった。予定通りに基地建設を進めるためには、インフレを防止して建設費の高騰を抑えると同時に、基地労働者の賃金をアメリカの負担を増やさずに上げる必要があった。
- このため、1950年から日本円の1ドル=360円に対して、異常ともいえる B 円の1ドル=120円という為替レートが導入された。等価交換だった円と B 円が1:3になり、日本から輸入する商品の値段が1/3になり、生産に励むより輸入した方がはるかに有利になった。このため、輸入と輸出の比率が5:1になり、膨大な赤字を生み出すことになる。
- この赤字を埋めたのが基地建設で労働者や業者に落ちるドル(B 円)だった。こうして「基地依存型輸入経済」の枠組みが出来上がった。沖縄から力強い製造業や、本土海外に提供できる商品が生まれなかった大きな要因である。大半の資源は日本から輸入したため、沖縄に支払われたドルは日本に流れ、日本の外貨獲得と経済再建の原資になった。
- シーツ少将は、民主主義の大義を掲げながらも、沖縄の長期保有と、恒久基地化を進めるための政策を見事に実現したのだ。
- 昭和28年、1953年度版の「琉球商工會議所會員名鑑」に掲載された理事たち
稲嶺一郎(琉球石油)、国場幸太郎(國場組)、大城鎌吉(大城組)、嘉数昇(琉球保険)、宮原守保(琉球銀行)、山川宗道(沖縄酒造組合連合会)、座安盛徳(沖縄タイムス)、宮里辰彦(琉球貿易)、名城嗣頼(琉球薬品)、当間嗣徳(沖縄山形屋)・・・
当時の沖縄で企業を発展させようと思えば、米軍政府にすり寄るしかなかった。多くは米軍と一蓮托生で成長してきた企業ばかりである。
- 1950年の朝鮮戦争の特需は、沖縄とは無縁だった。輸入を中心として基地依存経済の枠組みをはめられた沖縄では、戦争による物資やサービスの特需はあっても、労力を提供する以外に輸出するものがなかったからだ。
- 基本的に生産を放棄した基地依存経済である以上、ブローカーあて気な企業が横溢する、いびつで脆弱な経済構造にならざるを得なかった。
 - ◇ 1951年前後のスクラップ・ブームである。家族総出で原野に繰り出しては、手当たり次第にさびた鉄をくり返した。沖縄には、鉄の暴風によるおびただしい遺物があった。戦車、戦闘機の残骸、沈没船などの戦争スクラップは、島全体で250万トン以上あるといわれ、くず鉄が高値を呼ぶと、住民は、地面という地面を掘り返しては生活の足にした。1951年は、それまでの砂糖を抜いてスクラップが、沖縄の輸出品のトップに躍り出た。

- 参考図書：
- 岡本太郎著『沖縄文化論』 中公文庫、1996年6月
 - 岡本太郎著『自分の中に毒を持て』 青春文庫、1993年8月
 - 奥野修司著『ナツコ 沖縄密貿易の女王』 文春文庫、2007年10月
 - 利根川裕著『喜屋武マリーの青春』 南想社、1986年11月

1.